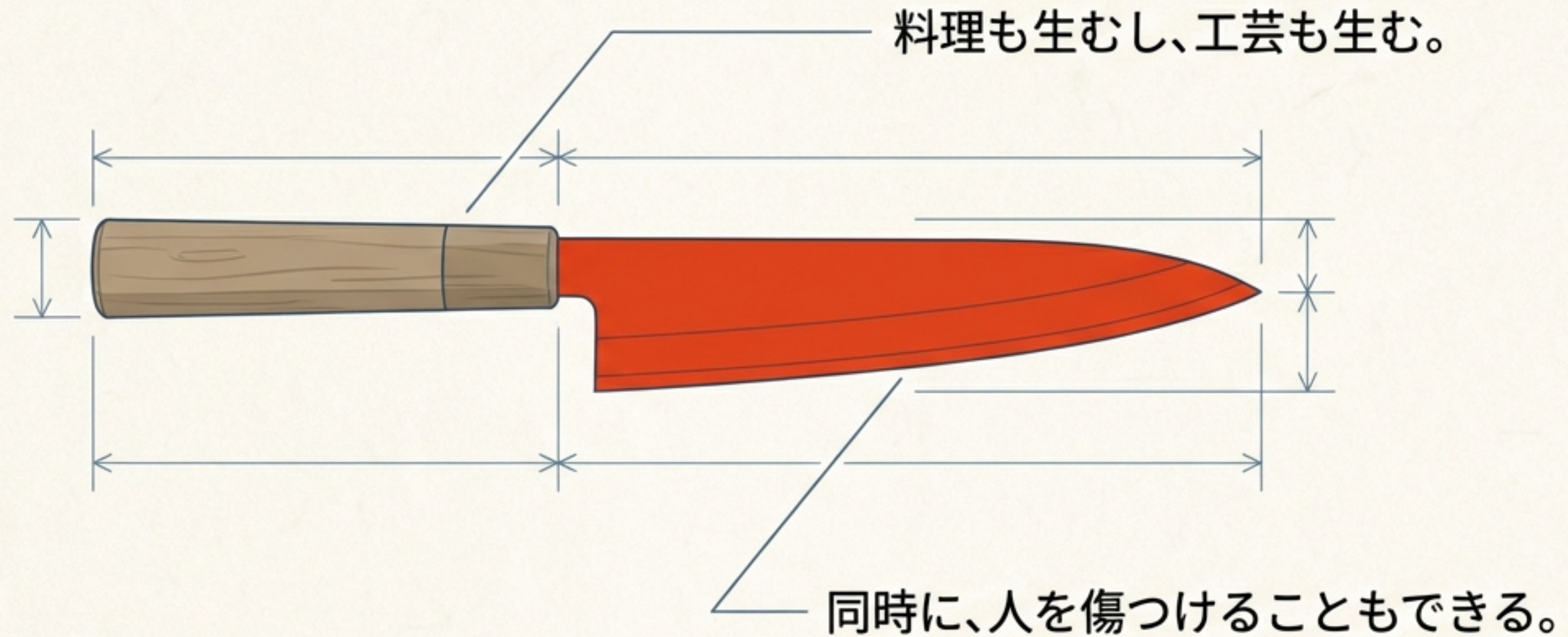
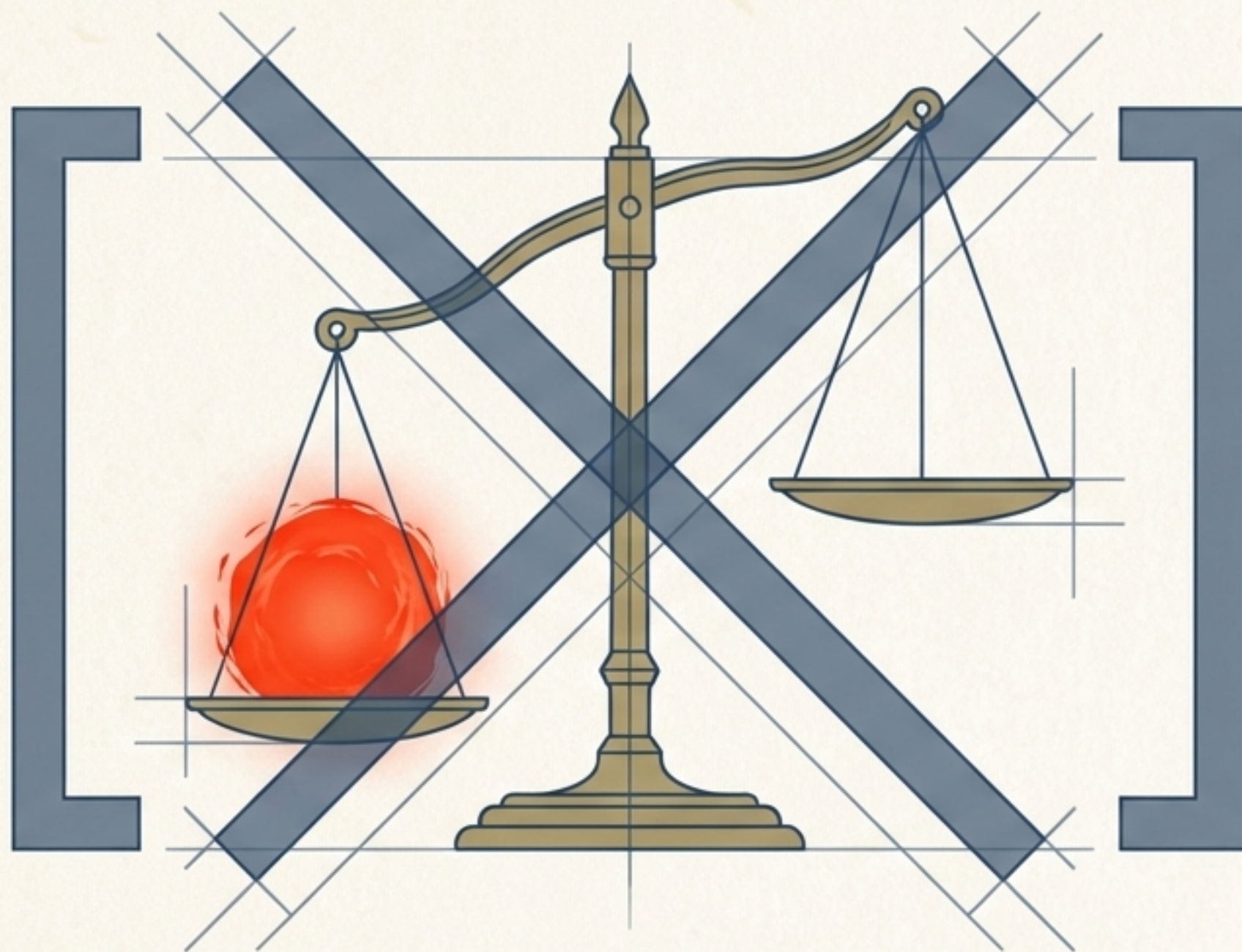


個性を裁かない

“優しさ”に頼らず、共に生きるための運用設計

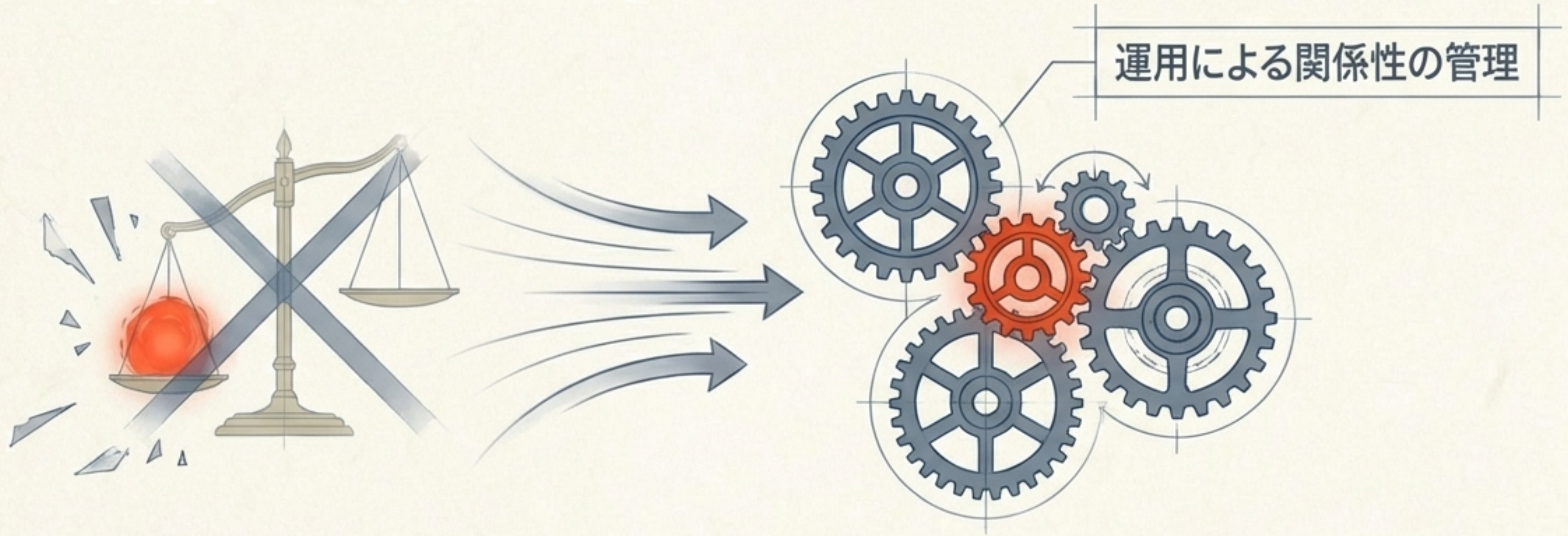
個性は刃物に似ている。





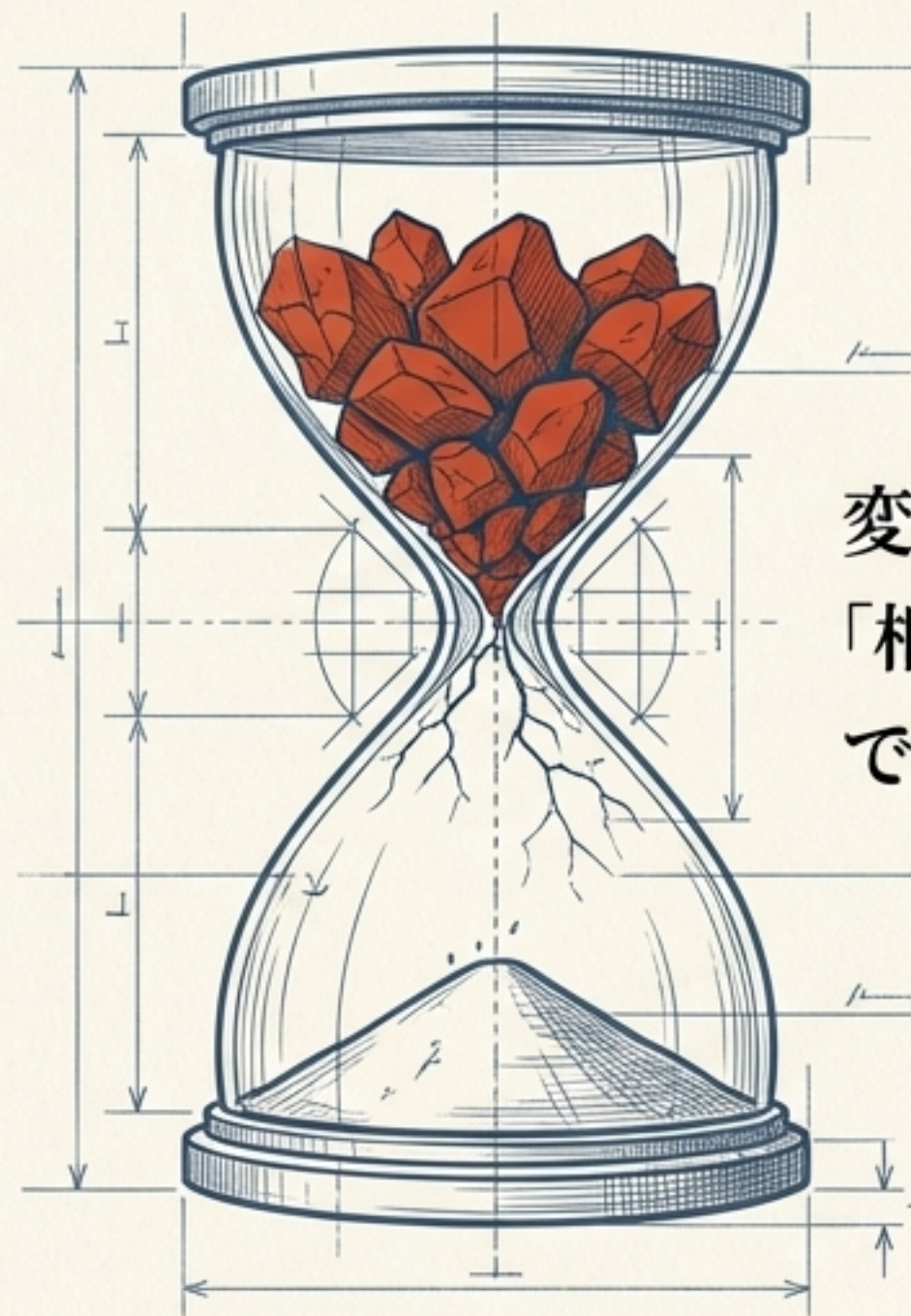
だから私たちはよく、「その個性は良いか悪いか」
という倫理の問いに向かいがち。

「多様性への受容が足りない」のではない。運用が下手なだけ。
個性は“関係への作用”で見る



価値観や個性は相性。関係性が壊れた時に「個性が関係を破壊したのか？」は別の話。
「個性は関係性に作用する」——ここまでが確からしいこと。

「待つ」は美德ではなく、設計問題

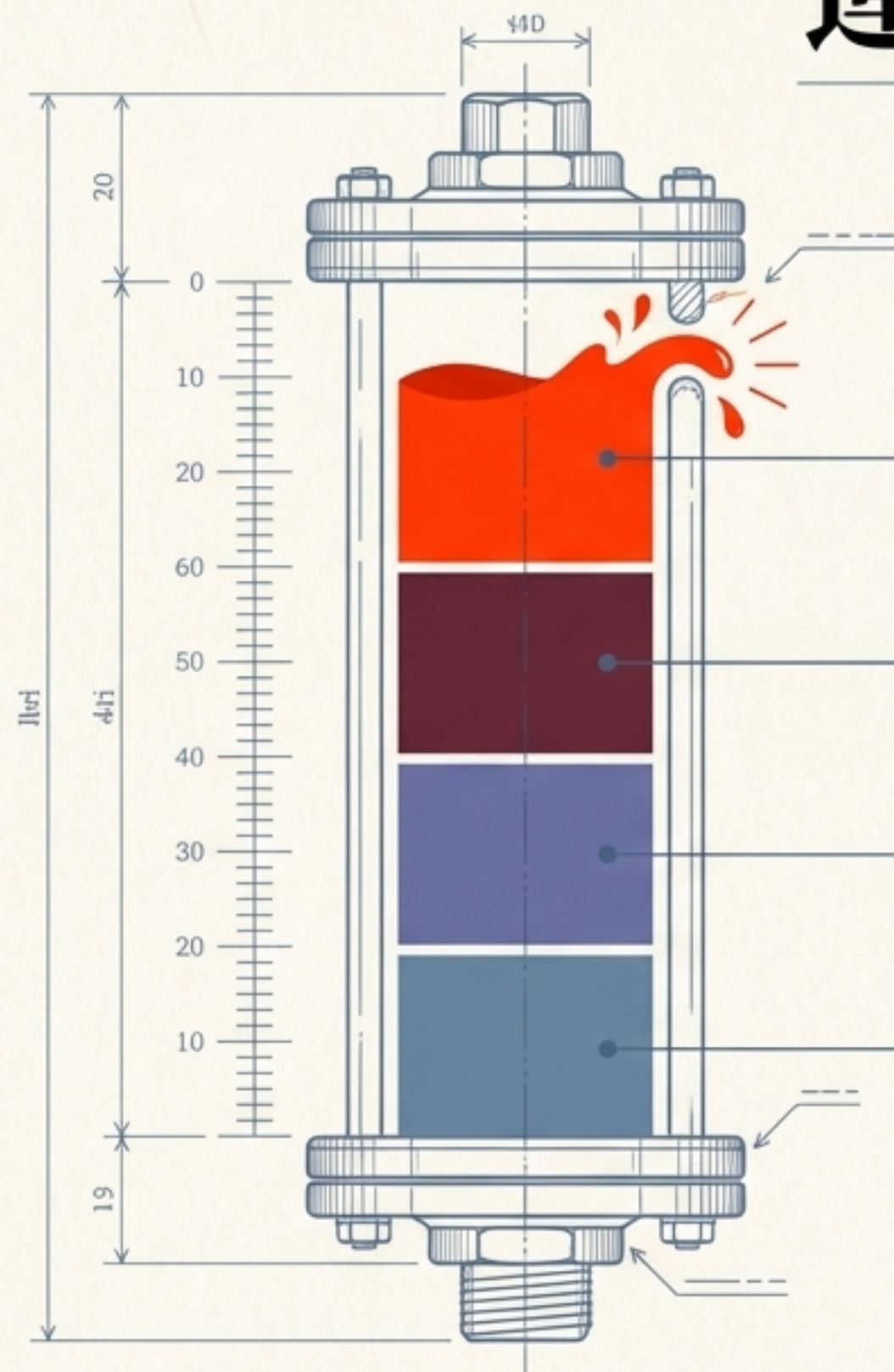


変化や適応には時間がかかる。
「相手のペースを待ちましょう」という正論。
でも実際には、待ちきれなくなる。

それは未熟だからではない。

運用負荷の蓄積

Operational Load Capacity



「もう十分に私は譲ってきた」

「話しても変わらない」という無力感

「自分の時間が削られている」という感覚

生活インフラが滞ることへの苛立ち

「あなたは冷たい」

「価値観が合わない」

人格の衝突に見える

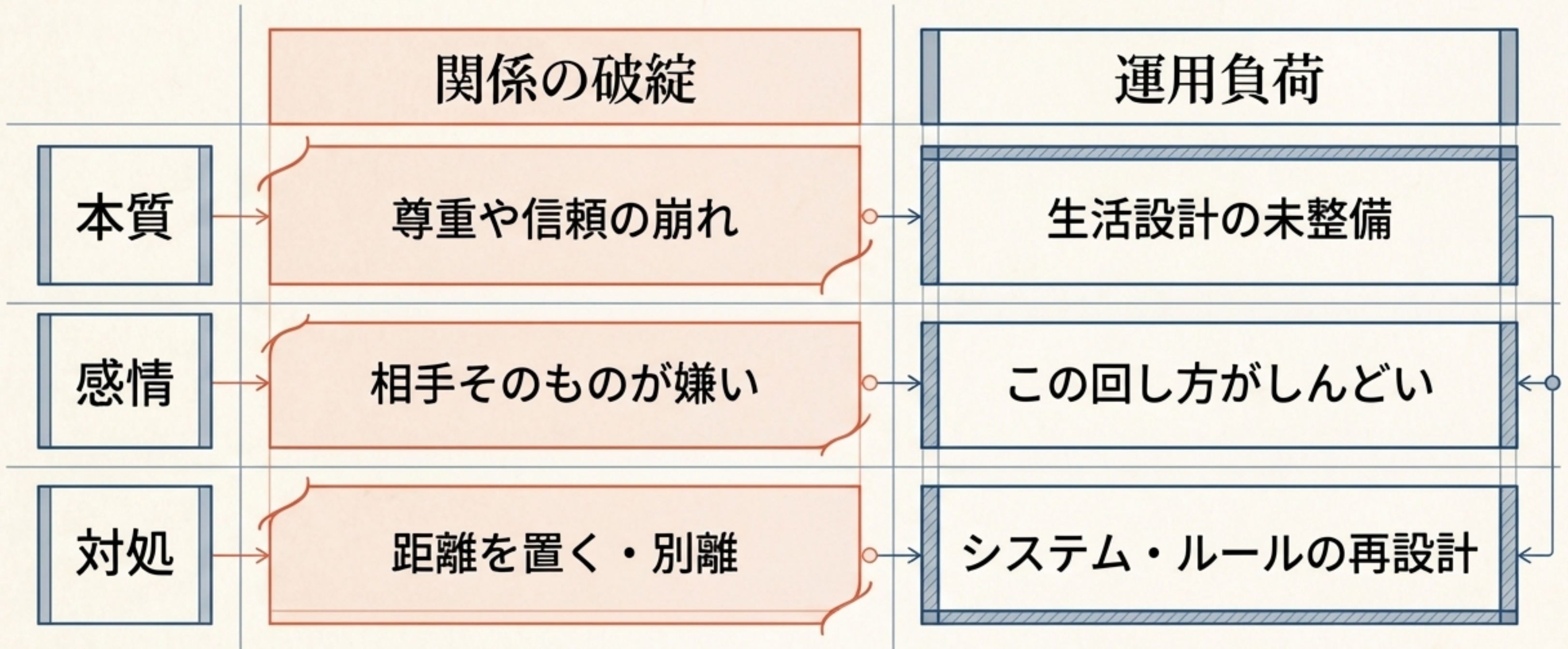
Surface Layer

Underground Layer

運用負荷が限界を超えたシステムの詰まり

負荷が限界を超えると、システムの問題が
人格の問題に見えてしまう。

関係の破綻と運用負荷は別物

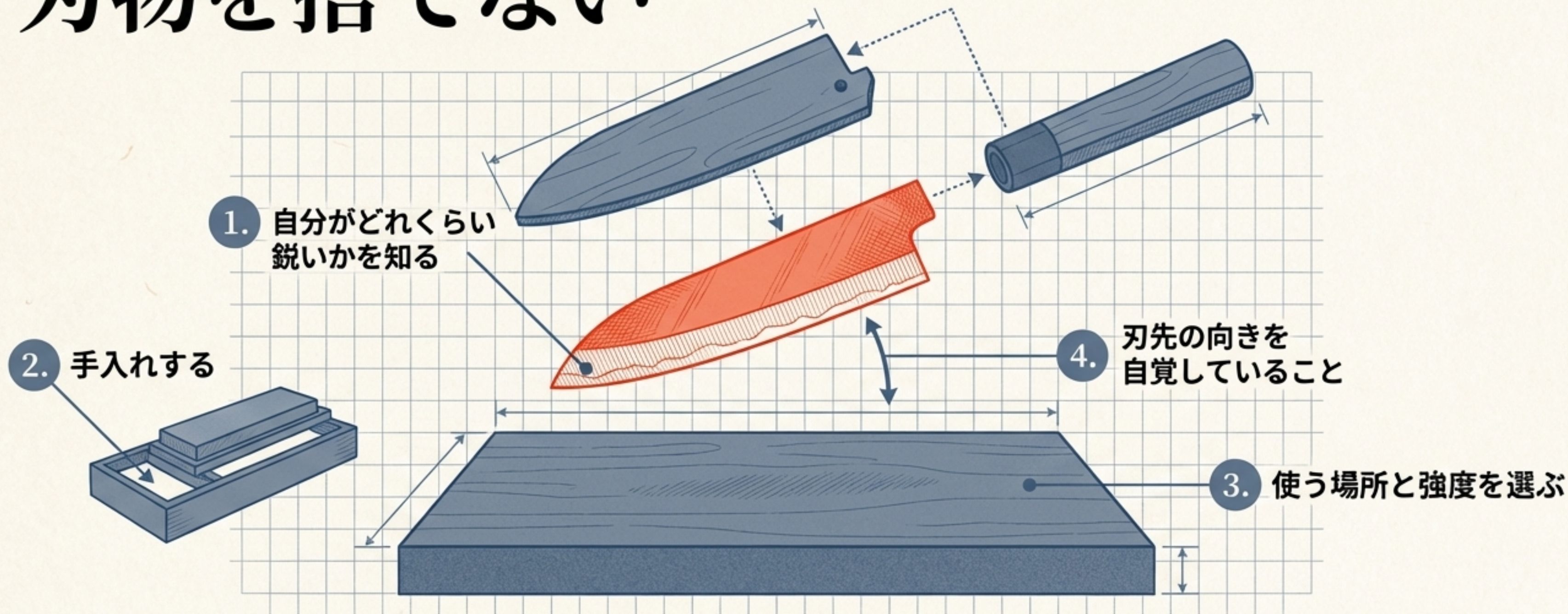


今、私は相手を嫌いになっているのか。
それとも、この回し方がしんどいだけなのか。



本当に後者なら、設計で解ける可能性はある。

刃物を捨てない



成熟とは、刃物を捨てることではない。世界中で安全に包丁は使われている。

人格の問題に帰結させすぎない

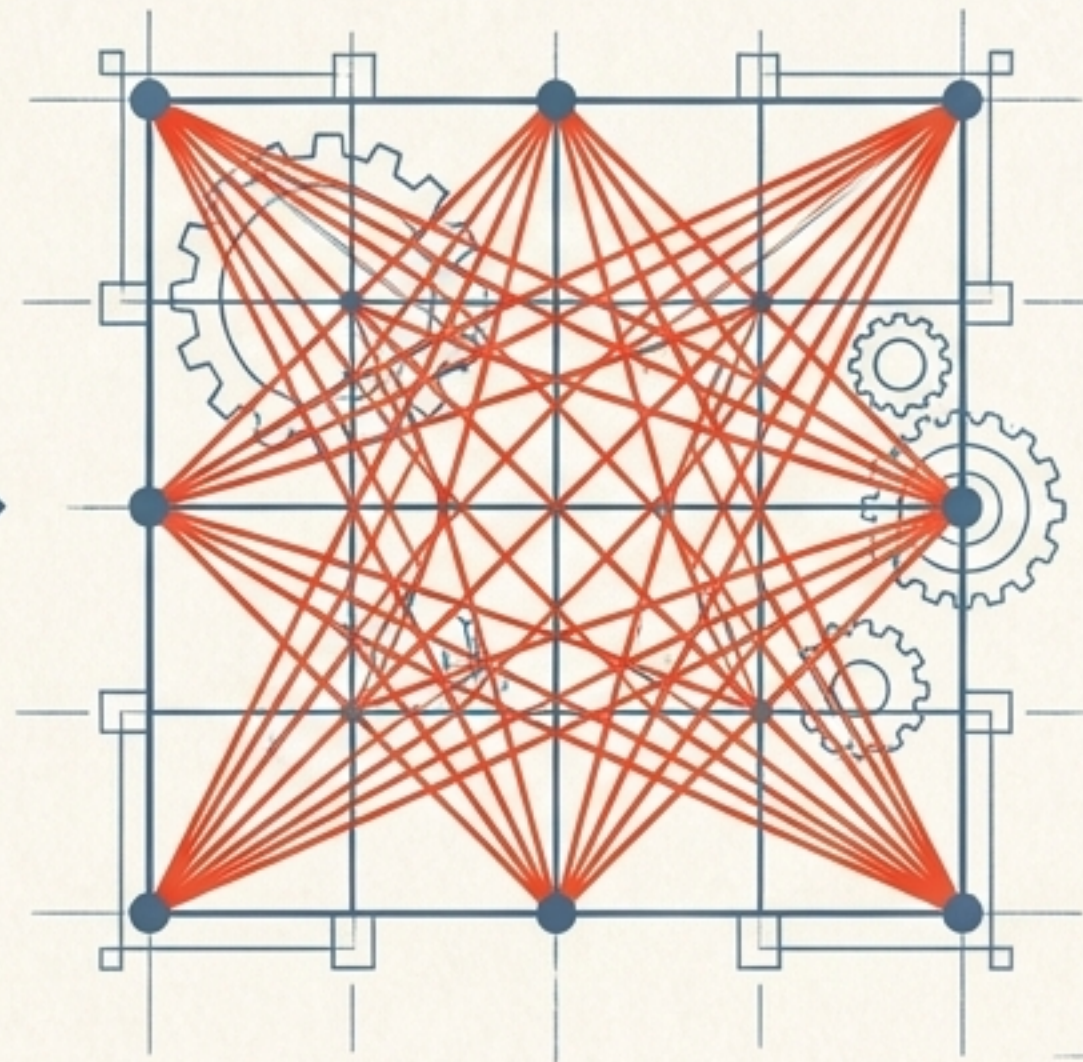
個性を倫理で裁くより、生活のガバナンスとして設計する。

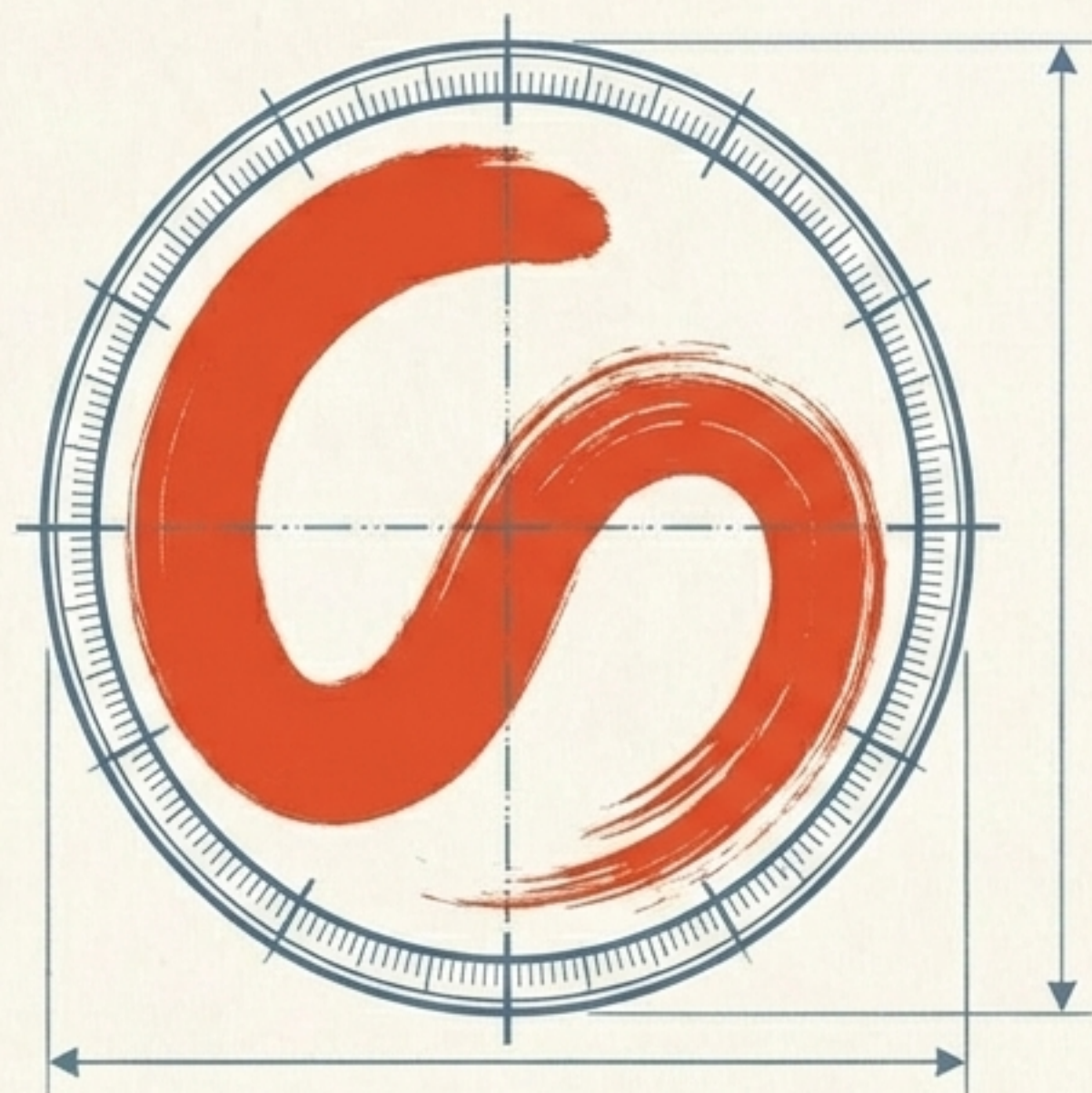
倫理と感情



設計による転換

ガバナンスと運用





それは「優しくなる」ことではなく、共に生きるための自治の実装。